

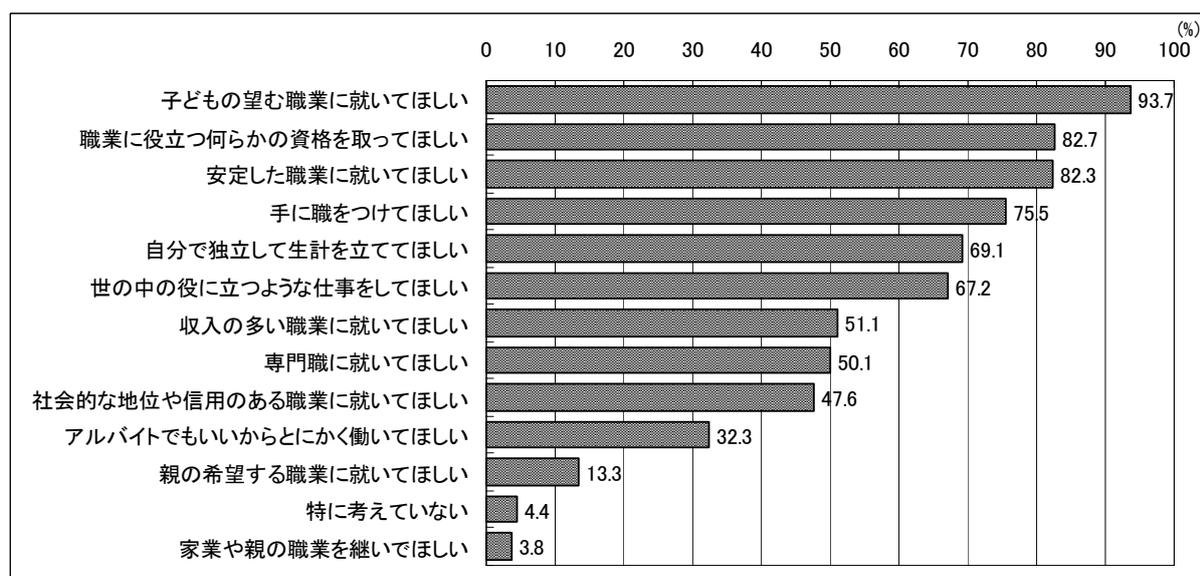
## 第2章 子どもの将来に対する保護者の期待

### 1. 問題意識

4府省庁が連携して進めている「若者自立挑戦プラン」の一貫として、学校教育におけるキャリア教育の推進から、キャリアガイダンスの重要性がより一層高まってきている。文部科学省が推進しているキャリア教育の実践は全国の学校へと広がりを見せ、理念としてではなく実践上の課題として学校現場での数多くの取り組みがなされてきた。しかしながら、地域社会や家庭への周知が十分ではなく、特に子どもの教育に直接大きな関わりを持つ、保護者にどのように理解されているのかが把握できていない現状がある。まずは、学校、地域社会、家庭の連携を推進する観点から、保護者が子供に対してもっている将来への期待や家庭教育の考え方、取り組みの実態などについて把握することが重要な課題である。本章では、保護者における子どもに対する家庭教育の考え方や実践の状況、子どもの将来に対する保護者の期待などについて実施した調査結果を分析、考察し、学校教育や地域社会での教育実践との連携に活用する資料としたい。

### 2. 子どもの将来について望むこと

まず、親は子どもの将来について何を望んでいるのかを検討した。本調査結果から、「あなたは、お子さんの将来についてどのようになってほしいと望んでいますか（または、お子さんが小さい頃、どうなってほしいと望んでいましたか）。」という設問に対する回答結果を図表2-1に示した。図表は「かなり当てはまる」～「全く当てはまらない」の5件法による回答のうち、「かなり当てはまる」と「やや当てはまる」を合計した値を図示したものである。



図表2-1 子どもの将来についての望み

図表2-1から、最も多い回答は「子どもが望む職業についてほしい (93.7%)」であり、以下、「職業に役立つ何らかの資格を取ってほしい (82.7%)」「安定した職業についてほしい (82.3%)」と続いていることが分かる。これらの結果から、親が自分の子どもの職業に望むこととして、最も一般的な感じ方は何よりも子どもが望む職業について欲しいということであり、それと同時、何らかの資格をとって安定した職業についてほしいといった考え方があると言える。

### (1)親の性別による比較

「かなり当てはまる」～「全く当てはまらない」の5件法による回答について、「かなり当てはまる」から5点～1点の得点化を行い、平均得点を算出した。更に、父親と母親の平均得点の違いを性別で比較したところ、図表2-2のように多くの項目で母親の値が高くなる結果となった。母親の方が父親よりも子どもの将来に対する期待が大きく、「職業に役立つ何らかの資格を取ってほしい」「安定した職業に就いてほしい」「手に職をつけてほしい」といった項目では、高い平均得点の項目の中でも特に母親が有意に高い値を示している。「子どもの望む職業に就いてほしい」といった望みは父親と母親の得点に有意な差はなかったが、資格や技術を身につけて安定した職業に就くといった、職業的安定を母親が強く望んでいることが言える。

図表2-2 子どもの将来に望むこと(性別平均値)

	男性 (N=702)	女性 (N=670)	有意 水準
子どもの望む職業に就いてほしい	4.50	4.52	
職業に役立つ何らかの資格を取ってほしい	4.24	4.37	**
安定した職業に就いてほしい	4.10	4.22	**
手に職をつけてほしい	3.91	4.11	**
自分で独立して生計を立ててほしい	3.89	4.00	
世の中の役に立つような仕事をしてほしい	3.87	3.79	
専門職に就いてほしい	3.52	3.59	
収入の多い職業に就いてほしい	3.49	3.51	
社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい	3.42	3.42	
アルバイトでもいいからとにかく働いてほしい	2.75	3.01	**
親の希望する職業に就いてほしい	2.39	2.53	**
特に考えていない	1.98	1.89	
家業や親の職業を継いでほしい	1.64	1.59	

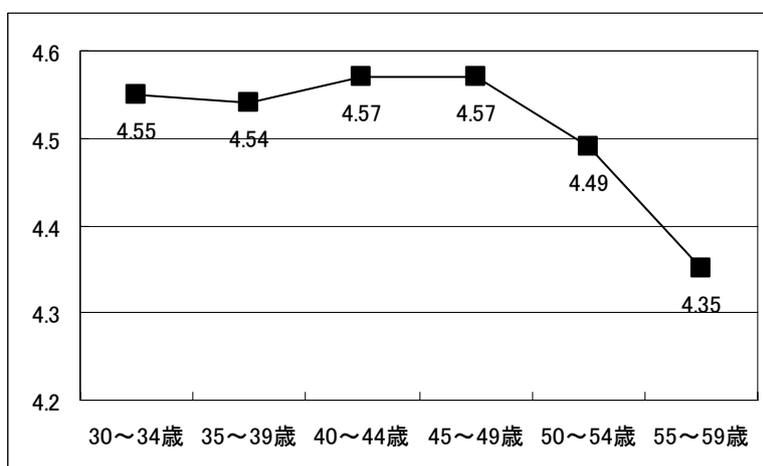
\*\* p<.01 \* p<.05

### (2)親の年齢による比較

平均得点を親の年代別に算出し、一元配置分散分析によって各年代間の差を確認したところ「子どもの望む職業に就いてほしい」「社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい」「安定した職業に就いてほしい」「世の中の役に立つような仕事をしてほしい」「特に考えて

いない」の項目において年齢間に有意な差がみられた\*1。

「子どもの望む職業に就いてほしい」では、30～49歳と55～59歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもの職業に対する自主的選択への期待は、40歳代をピークに50歳代では下降していく傾向が見られる(図表2-3-1)。

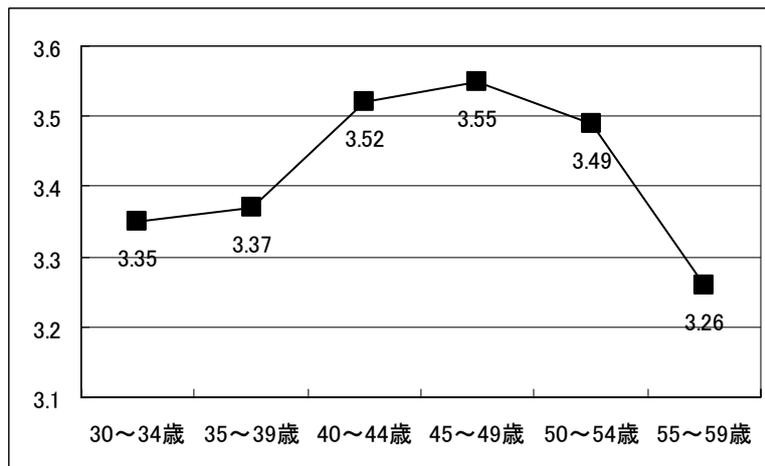


図表2-3-1 子どもの望む職業に就いてほしい

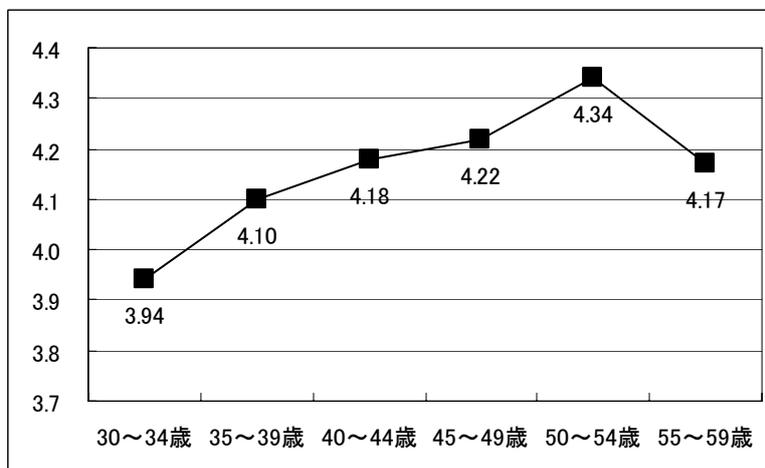
「社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい」では、45～49歳と55～59歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。職業への地位志向傾向は40～54歳をピークに30歳代、50歳代後半に下がる傾向が見える。40～54歳は、職業における地位や社会的信用などを重視する働き盛りの年代でもあり、現在の職業への思いが子どもへの期待となっているのではないかと推察される(図表2-3-2)。

「安定した職業に就いてほしい」では、30～34歳と40～59歳、35～39歳と50～54歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。職業への安定志向傾向は50～54歳がピークとなっているが、この世代では子どもが成人し、就職し始めるころであり、フリーターの数の多いことから安定した職業に就くことを期待する傾向が高くなると思われる(図表2-3-3)。

\*1 本報告書全体を通じて、保護者の年齢別の分析よりも、子どもの年齢別の分析の方が適切であるように感じられる場合がある。ただし、今回の調査回答者では、中高校生、大学生、成人と複数の年齢にまたがって子どもがいる場合が多く(子ども1人17.4%、2人55.1%、3人以上27.5%)、そのため、ある保護者が成人の親なのか、大学生の親なのか、中高生の親なのか、小学生以下の子の親なのかが一意に定めにくかった。その点、保護者の年齢は、当然ながら各保護者で一意に特定することができ、分析に用いやすいというメリットがあった。以上の理由から、第2章以降、特に詳しい分析を要しない場合には、子どもの年齢ではなく保護者の年齢を用いた。実際には、保護者の年齢と子どもの学校段階は相関が高く、保護者の年齢と、小学生以下の子どもがいるか否か ( $r=.764$   $p<.01$  順位相関係数、以下同じ)、同じく中高生の子どもがいるか否か ( $r=.117$   $p<.01$ )、同じく大学生の子どもがいるか否か ( $r=.347$   $p<.01$ )、同じく成人の子どもがいるか否か ( $r=.708$   $p<.01$ ) は、おおむね対応していた。したがって、保護者の年齢と子どもの年齢のどちらの変数を用いても、ほぼ同じように考察できる結果になっている。



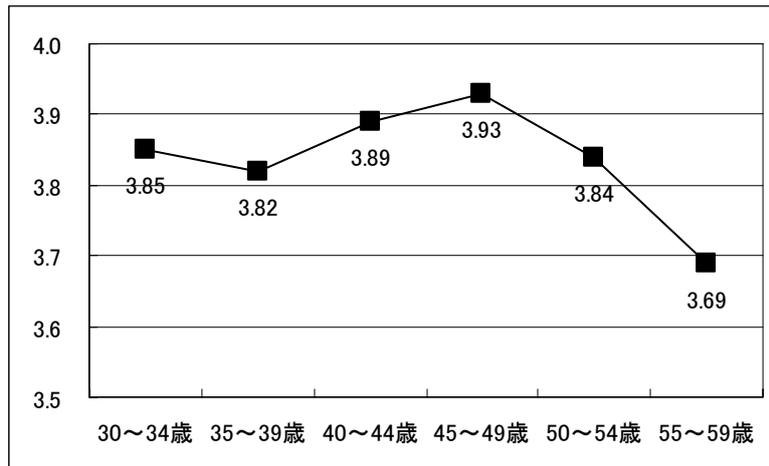
図表2-3-2 社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい



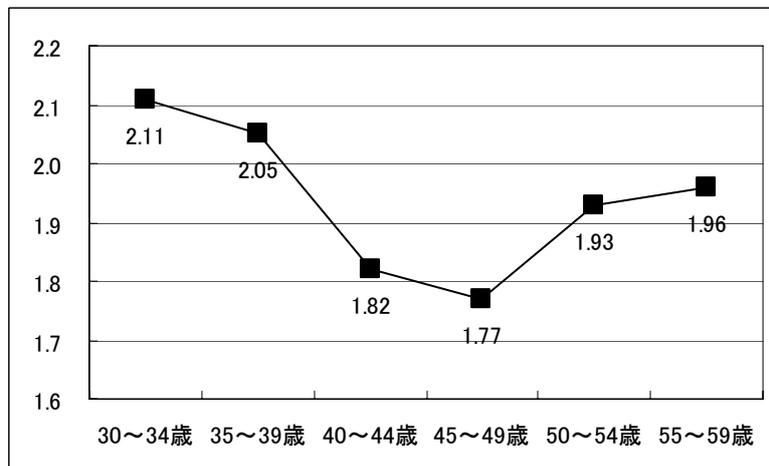
図表2-3-3 安定した職業に就いてほしい

「世の中の役に立つような仕事をしてほしい」では、45~49歳と55~59歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。職業への社会貢献意識は45~49歳をピークに下がる傾向があるが、親の社会的・職業的役割や職場での貢献などが反映された結果ではないかと考えられる (図表2-3-4)。

「特に考えていない」では、得点は低い値ではあるが、30~34歳と40~44歳、45~49歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもの将来についての望みがない世代が30歳代であり、子供がまだ小さいことも考えられ、将来についてまだ考える時期でもないといった年代でもあることから、無関心となっている傾向が伺える (図表2-3-5)。



図表2-3-4 世の中の役に立つような仕事をしてほしい

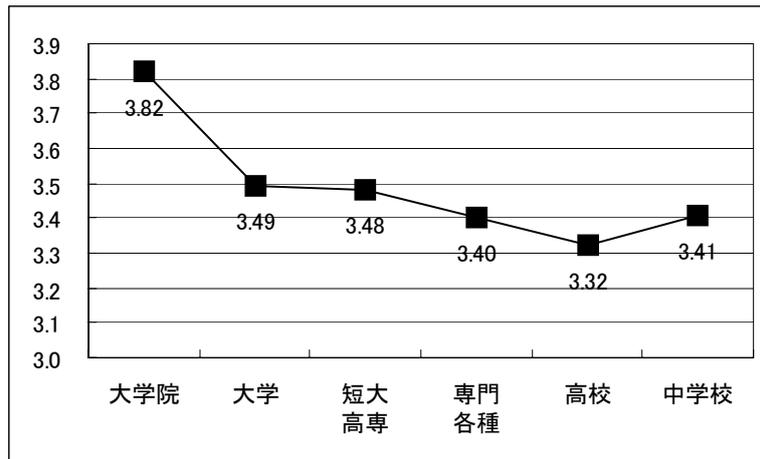


図表2-3-5 「特に考えていない」

### (3) 親の学歴による比較

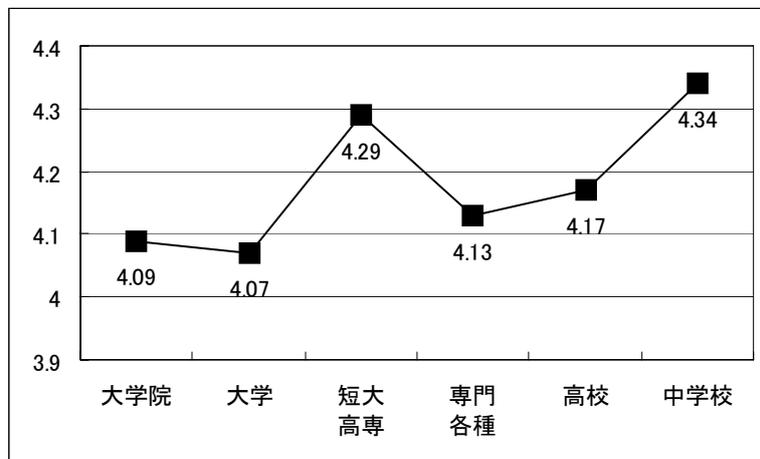
平均得点を親の学歴別に算出し、一元配置分散分析によって各学歴間の差を確認したところ「社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい」「安定した職業に就いてほしい」「専門職についてほしい」「世の中の役に立つような仕事をしてほしい」の項目において学歴間に有意な差がみられた。

「社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい」では、高校と大学院との間に有意な差が認められた ( $p < .05$ )。高校から学歴が高くなるに従って職業への地位志向傾向が高くなる傾向がある (図表2-4-1)。



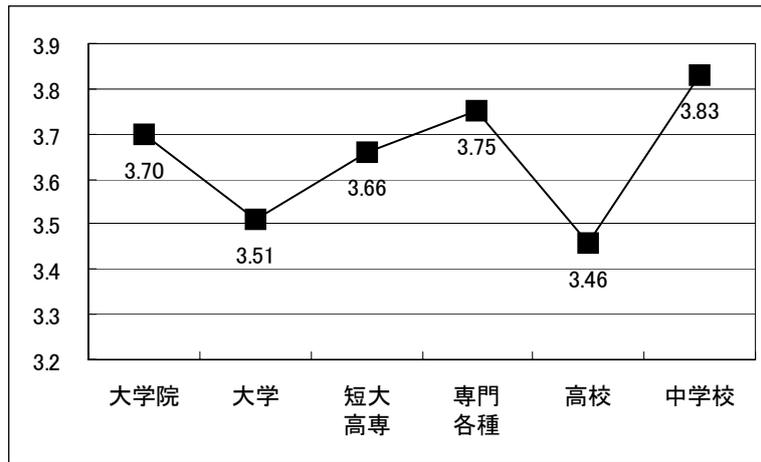
図表2-4-1 社会的な地位や信用のある職業に就いてほしい

「安定した職業に就いてほしい」では、大学と短大・高専との間に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。平均得点は中学の方が高いが、中学は $n=29$ と小さいため有意な差とならなかった。短大・高専卒、高卒の親は、大卒の親に比べて職業的安定が確保されていない場合が多く、職業的安定に対する不安が大きいため、子どもの職業的安定を好むといったことを反映した結果であろう (図表2-4-2)。



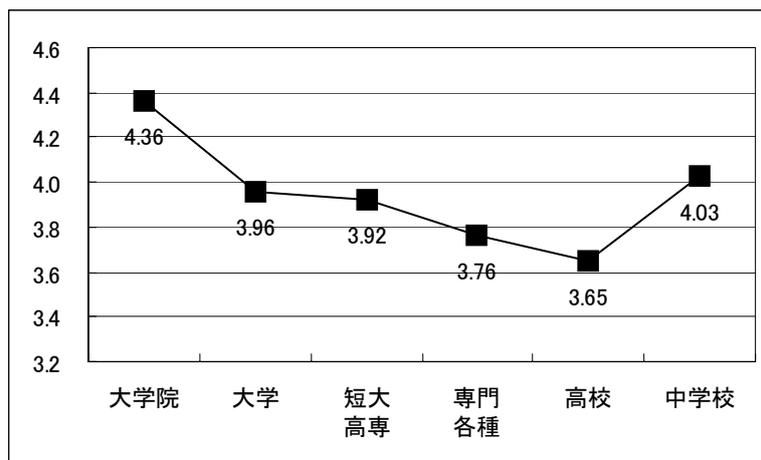
図表2-4-2 安定した職業に就いてほしい

「専門職についてほしい」では、高校と専門・各種学校との間に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。専門・各種学校卒や中学卒の親は学歴ではなく職業的能力を高めて仕事の場を求めていこうとする実態が反映された結果であろう (図表2-4-3)。



図表2-4-3 専門職に就いてほしい

「世の中の役に立つような仕事をしてほしい」では、大学院と短大・高専、専門・各種学校、高校、高校と大学、短大・高専との間に有意な差が認められた ( $p < .05$ )。高校卒から学歴が高くなるに従って職業への社会貢献意識が高くなる傾向がみえる (図表2-4-4)。



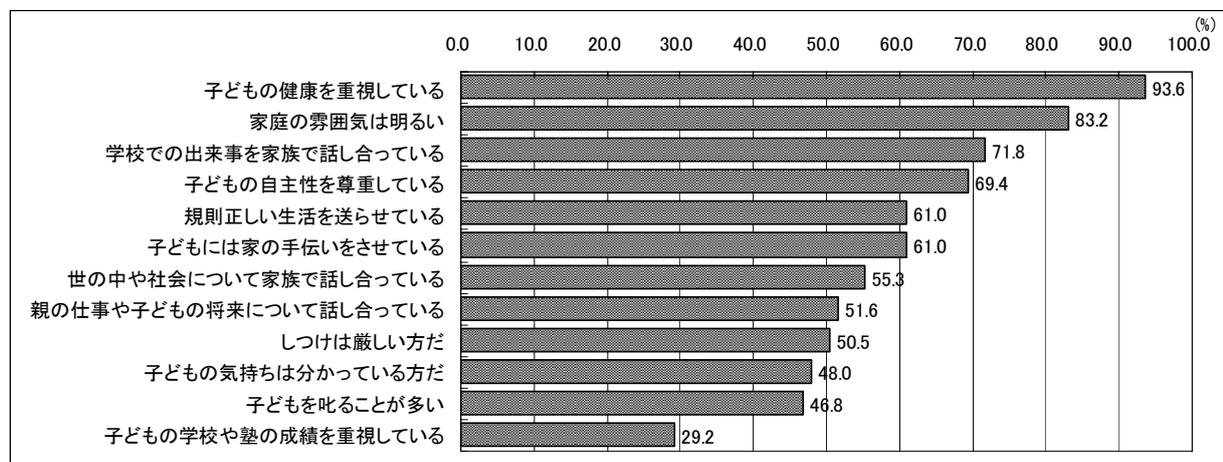
図表2-4-4 世の中の役に立つような仕事をしてほしい

### 3. 家庭における子どもとの接し方

家庭における子どもとの接し方について検討を行った。本調査から「あなたのご家庭での子どもとの接し方についてお答えください (または、お子さんが小さい頃どうであったかをお答えください)」という設問に対する回答結果を図表2-5にまとめた。図2-5は「かなり当てはまる」～「全く当てはまらない」の5件法による回答のうち、「かなり当てはまる」と「やや当てはまる」を合計した値を図示したものである。

図2-5から、最も多い回答は「子どもの健康を重視している (93.6%)」であり、以下、「家庭の雰囲気は明るい (83.2%)」「学校での出来事を家族で話し合っている (71.8%)」が続

いている。子どもの健康を第一に考え、明るい雰囲気の家で学校での出来事を話し合っている様が、一般的な家庭での子どもの接し方であると言えるだろう。



図表2-5 家庭における子どもとの接し方

### (1) 親の性別による比較

「かなり当てはまる」～「全く当てはまらない」の5件法による回答について、「かなり当てはまる」から5点～1点の得点化を行い、平均得点を算出した。更に、父親と母親の平均得点の違いを性別で比較したところ、表2-6のように多くの項目で母親の値が高くなる結果となった。母親の方が父親よりも子ども接する機会が多く意識も高い現実が表されて、「子どもの健康を重視している」「学校での出来事を家族で話し合っている」といった項目では、高い平均得点の項目の中でも特に母親が有意に高い値を示している。子供の健康や子供との会話などは母親がやはり家庭での中心となって子供と接していることが分かる。

図表2-6 家庭における子どもとの接し方(性別平均値)

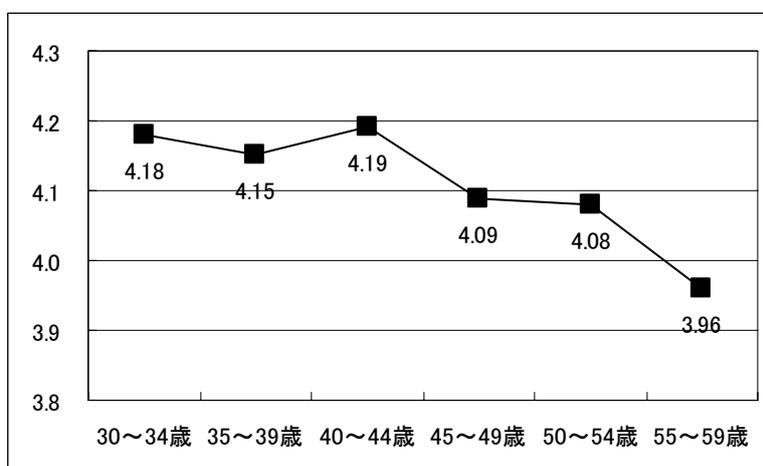
	男性 (N=702)	女性 (N=670)	有意 水準
子どもの健康を重視している	4.37	4.48	**
家庭の雰囲気は明るい	4.13	4.08	
学校での出来事を家族で話し合っている	3.71	3.91	**
子どもの自主性を尊重している	3.79	3.78	
規則正しい生活を送らせている	3.51	3.74	**
子どもには家の手伝いをさせている	3.50	3.68	**
世の中や社会について家族で話し合っている	3.36	3.61	**
子どもの気持ちは分かっている方だ	3.43	3.49	
しつけは厳しい方だ	3.36	3.51	**
親の仕事や子どもの将来について話し合っている	3.36	3.61	**
子どもを叱ることが多い	3.21	3.45	**
子どもの学校や塾の成績を重視している	2.84	2.99	**

\*\* p<.01 \* p<.05

## (2)親の年齢による比較

平均得点を親の年代別に算出し、一元配置分散分析によって各年代間の差を確認したところ「家庭の雰囲気は明るい」「学校での出来事を家族で話し合っている」「子どもの自主性を尊重している」「子どもには家の手伝いをさせている」「規則正しい生活を送らせている」「世の中や社会について家族で話し合っている」「親の仕事や子どもの将来について話し合っている」「しつけは厳しい方だ」「子どもを叱ることが多い」「子どもの学校や塾の成績を重視している」の項目において年齢間に有意な差がみられた。

「家庭の雰囲気は明るい」では、55～59歳と30～44歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。若い世代の家庭の雰囲気は明るく、保護者の年齢と共に家庭の明るい雰囲気は低くなっていく傾向がある (図表2-7-1)。

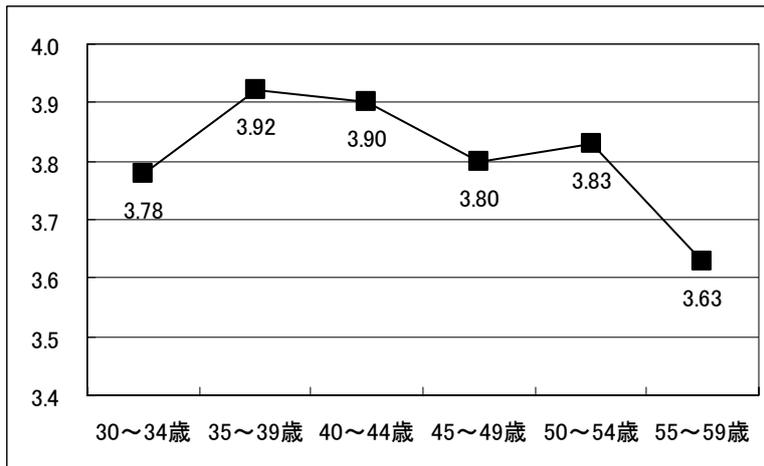


図表2-7-1 家庭の雰囲気は明るい

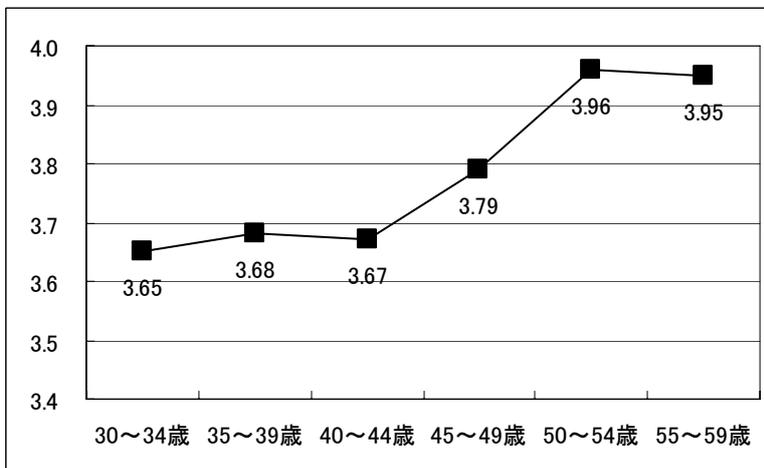
「学校での出来事を家族で話し合っている」では、55～59歳と35～44歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもが小学校や中学校の世代では学校のことを家庭でも話したりしているようである (図表2-7-2)。

「子どもの自主性を尊重している」では、50～59歳と30～44歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもが小学校、中学校、高等学校、大学等へと進学する過程で、段階的に自主性を尊重する家庭教育の在り方が示されている。特に40～54歳までの値の上昇が、子どもがちょうど小学校高学年から大学生あたりの親の年齢に一致することが分かる (図表2-7-3)。

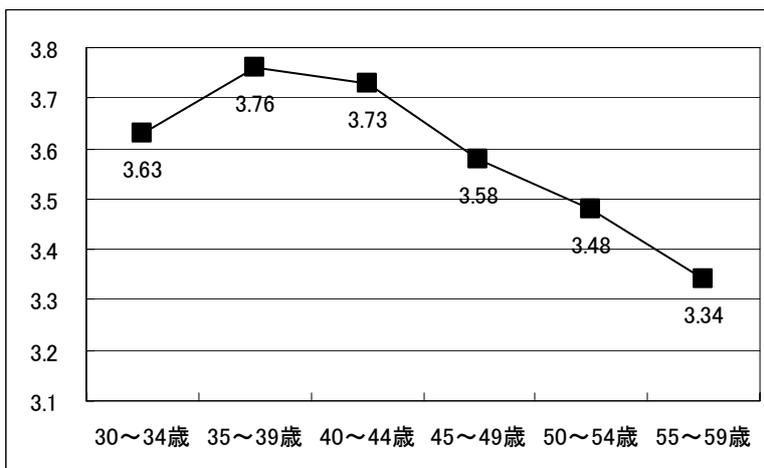
「子どもには家の手伝いをさせている」では、55～59歳と30～44歳、50～54歳と35～49歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもが小学校段階では家事手伝いをよくやらせるが、おおきくなっていくと家の手伝いをしなくなる傾向が一般的にある (図表2-7-4)。



図表2-7-2 学校での出来事を家族で話し合っている

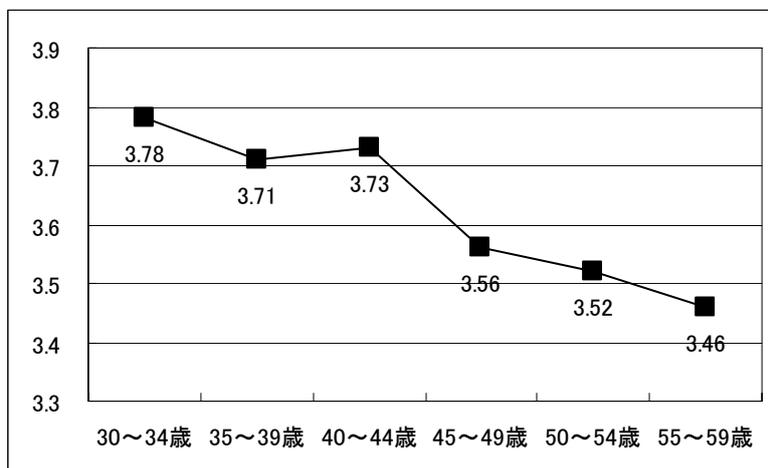


図表2-7-3 子どもの自主性を尊重している



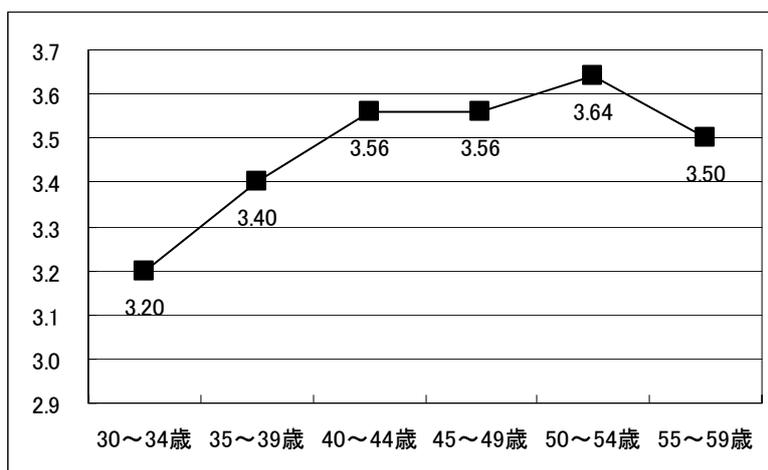
図表2-7-4 子どもには家の手伝いをさせている

「規則正しい生活を送らせている」では、50～54歳と30～44歳、55～59歳と30～44歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもが小学校段階までは規則正しい生活を家庭でもしつけられるが、中学を過ぎたあたりから夜更かしや食事の不規則など、規則正しい生活を送ることができなくなってくる (図表2-7-5)。



図表2-7-5 規則正しい生活を送らせている

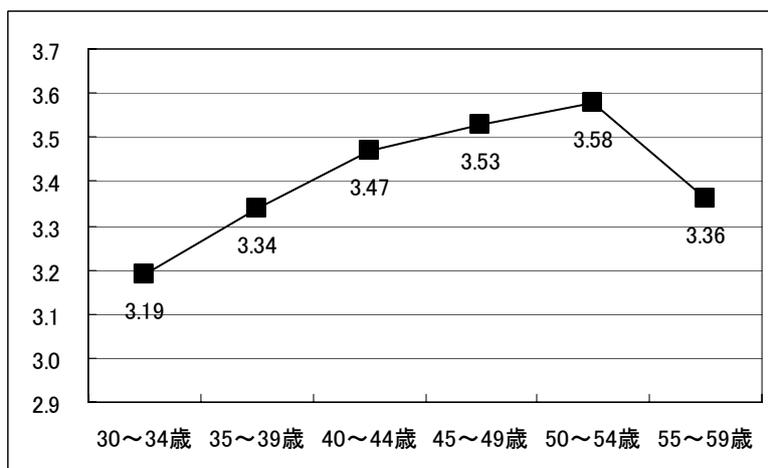
「世の中や社会について家族で話し合っている」では、30～34歳と40～59歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもが大きくなるにつれて、世の中や社会のことについて話す機会が多くなっていく (図表2-7-6)。



図表2-7-6 世の中や社会について家族で話し合っている

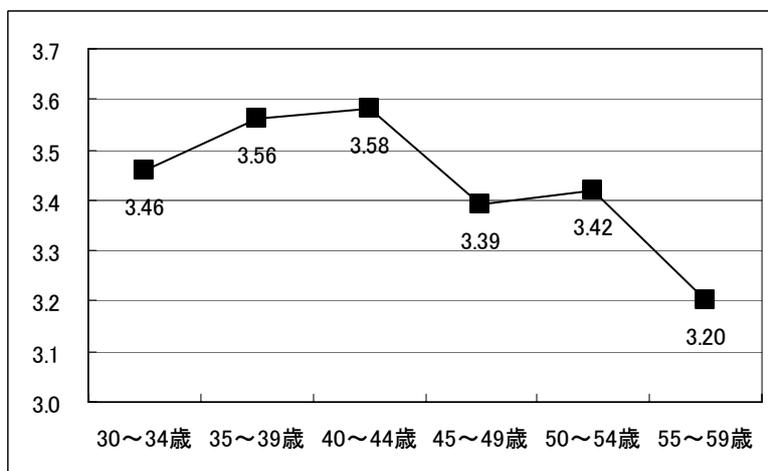
「親の仕事や子どもの将来について話し合っている」では、30～34歳と40～54歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもの成長と共に親の仕事や子どもの将来のことについて話し合う機会が増えていくが、55歳を過ぎる頃から子どもと話す機会が少なくなっていく。自

立して家を出るなどの機会が増えてくるからではないかと考えられる（図表 2-7-7）。



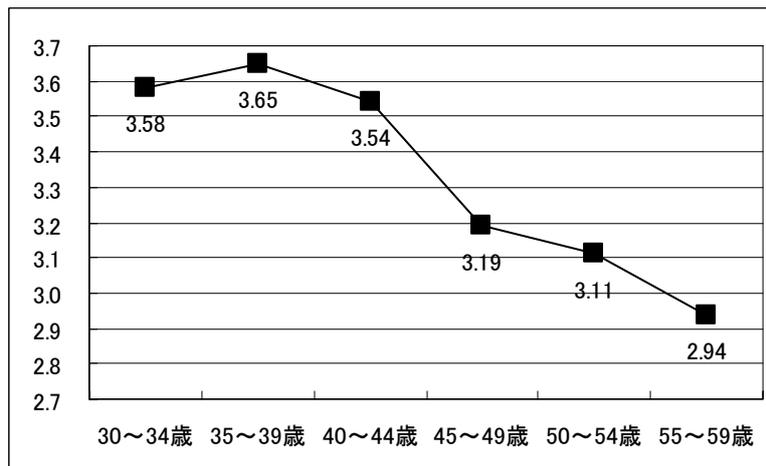
図表2-7-7 親の仕事や子どもの将来について話し合っている

「しつけは厳しい方だ」では、55~59歳と30~44歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。50歳代後半ではほとんどしつけが必要な状況ではなくなっている。子どもの成長と共に厳しいしつけは必要なくなってくるものである（図表 2-7-8）。



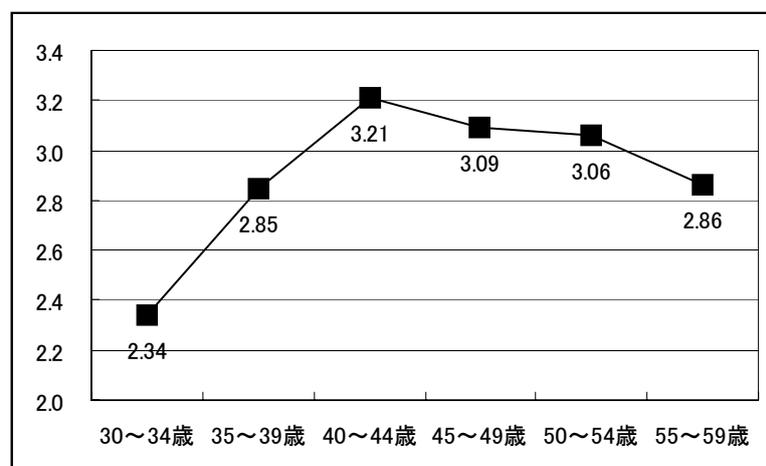
図表2-7-8 しつけは厳しい方だ

「子どもを叱ることが多い」では、30~34歳と45~59歳、35~39歳と45~59歳、40~44歳と45~59歳、45~39歳と55~59歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもを叱ることでは年代間の差が大きく、小学校の時には叱っていてもやがて大きくなれば叱ることも少なくなっていく（図表 2-7-9）。



図表2-7-9 子どもを叱ることが多い

「子どもの学校や塾の成績を重視している」では、30~34歳と35~59歳、35~39歳と40~45歳、40~44歳と55~59歳に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもの学校や塾の成績を重視するのは、子どもが中学生あたりで高校受験との関連から意識が高くなっていると考えられる (図表2-7-10)。



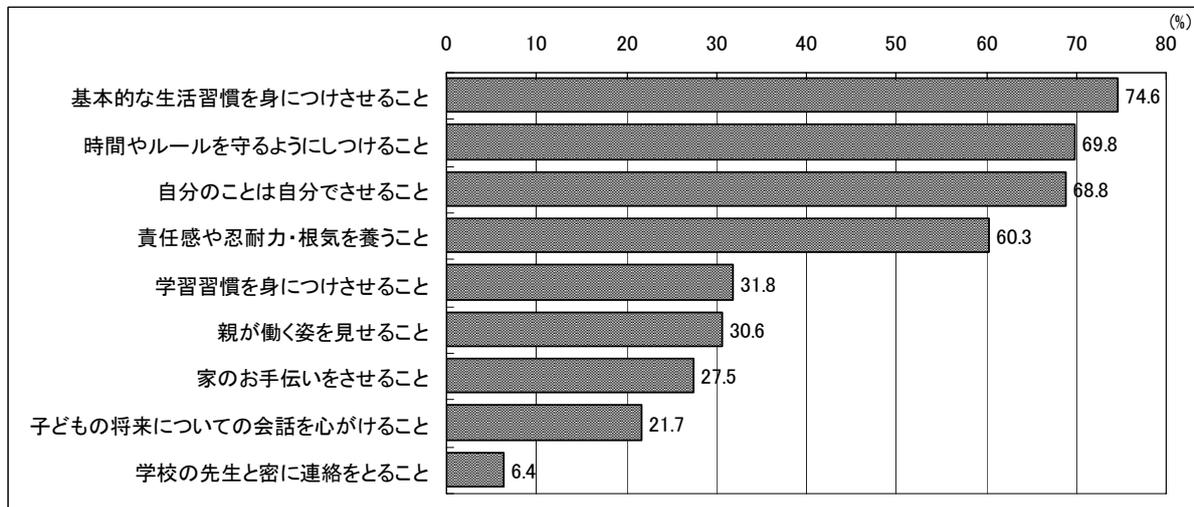
図表2-7-10 子どもの学校や塾の成績を重視している

#### 4. 子どもの将来の職業生活のために家庭で行っていること

次に、子どもが将来自立した生活を送れるようにするために、家庭でどのようなことが必要かを検討した。本調査結果から「子どもが将来自立した職業生活を送れるようにするために、家庭ではどのようなことが必要だと思いますか」という設問に対する回答結果を図表2に示した。図表は「かなり必要」～「全く必要でない」の5件法による回答のうち、「かなり必要」の値を図示したものである。

図表2-8で最も多い回答は「基本的な生活習慣を身につけさせること」であり、以下、

「時間やルールを守るようにしつけること」「自分のことは自分でさせること」が続いている。親が家庭で行う職業教育として、「基本的な生活習慣」「時間やルール」「自分のことを自分でする」といった事がらが特に必要であると考えられていることが分かる。



図表2-8 将来の職業生活のための家庭での必要事項

### (1) 親の性別による比較

「かなり必要」～「全く必要でない」の5件法による回答について、「かなり必要」から5点～1点の配点を行い、平均得点を算出した。更に、父親と母親の平均点の違いを性別で比較したところ、図表2-9のように全ての項目で母親の値が高くなる結果となった。母親の方が父親よりも子どもが将来自立した職業生活を送れるようにするために、家庭での教育の必要性を強く感じている傾向が示されている。平均得点では、「基本的な生活習慣を身につけさせること」「時間やルールを守るようにしつけること」「自分のことは自分でさせること」「責任感や忍耐力・根気を養うこと」などが特に高く、父親に比べて母親が有意に高い値を示している。子どもの将来の職業生活のためには、学校に頼るのではなく、家庭でしっかりとした躰を行うことが重視されている。

図表2-9 将来の職業生活のための家庭での必要事項(性別平均値)

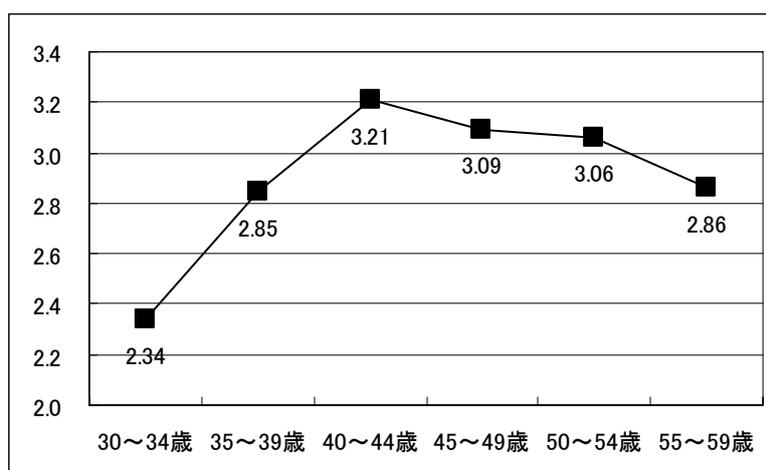
	男性 (N=702)	女性 (N=670)	有意 水準
基本的な生活習慣を身につけさせること	4.65	4.80	**
時間やルールを守るようにしつけること	4.61	4.75	**
自分のことは自分でさせること	4.63	4.72	**
責任感や忍耐力・根気を養うこと	4.53	4.61	**
学習習慣を身につけさせること	4.13	4.17	
家のお手伝いをさせること	3.94	4.18	**
親が働く姿を見せること	3.92	4.11	**
子どもの将来についての会話を心がけること	3.88	3.94	
学校の先生と密に連絡をとること	3.21	3.25	

\*\* p<.01 \* p<.05

## (2)親の年齢による比較

平均得点を親の年代別に算出し、一元配置分散分析によって各年代間の差を確認したところ「子どもの将来についての会話を心がけること」の項目において年齢間に有意な差がみられた。

「子どもの将来についての会話を心がけること」では、30～44歳と50～54歳との間に有意な差が認められた ( $p<.05$ )。子どもが大きくなってからは子どもの将来についての会話が必要といった認識が高まってくる (図表2-10)。



図表2-10 子どもの将来についての会話を心がけること

## 5. まとめ

親が自分の子どもの将来の職業に望むこととして、最も一般的な思いは何よりも子どもが望む職業について欲しいということであり、それと同時に何らかの資格をとって、安定した職業についてほしいといった考え方がある。今は、家業や親の職業を子どもに継いでほしいと言った気持ちはあまりなく、子どもの自由な職業選択を期待している。これは、母親の方が子どもの将来に対する期待が大きく、職業的安定を母親が強く望んでいるといえる。また、子どもの職業に対する自主的選択への期待や職業への地位志向傾向、安定志向傾向は親の年齢による違いがでている。親の学歴では、高校から学歴が高くなるに従って職業への地位志向傾向が高くなる傾向があり、子供に職業的安定を求める傾向は、高学歴ほど低くなっている。

家庭における子どもとの接し方において多くの家庭では、子どもの健康を第一に考え、明るい雰囲気の中で学校での出来事を話し合っている。家庭の雰囲気は、親の年齢が若いほど明るく、子どもの自主性を尊重する態度は、子どもが小学校、中学校、高等学校、大学等へと進学する過程で、段階的に高まっていくが、逆に家事手伝いや規則正しい生活への意識は、小さい子どもをもつ年齢の若い親の方が強く、親の年代が上がるごとに低くなっていく。

傾向にある。子どもが大きくなるにつれて規則的な生活やしつけを重視する程度は低くなるが、そのかわり学業成績や子どもの自主性を重視するようになる。

子どもの将来の職業生活のために家庭で行っていることでは、基本的な生活習慣を身につけさせることや約束を守ること、一般的なしつけ、自立させることや責任感や忍耐力・根気を養うことなどが挙げられ、父親よりも母親がその中心となっていることが分かった。

本調査の分析により、家庭における子どもの将来の職業に対する保護者の望みや家庭での取り組み、子どもとの接し方などについて、具体的な項目を通して保護者の意識や家庭教育の実態を確認することができた。従来から、学校教育におけるキャリアガイダンスでは保護者・家庭教育との強力・連携を進めるという考え方があったが、今後は、本研究の実証的なデータによる成果を活用して、児童生徒・学生へのキャリア教育の充実を図ることが重要な課題となるであろう。